

寵児

寵児

津島佑子

河出書房新社



寵児

昭和五十三年六月三十日 初版発行
昭和五十四年二月二十日 九版発行

定価は函・帯に表示してあります

著者 津島佑子

装幀者 挿画 山本文彦
装幀 多田進

発行者 佐藤皓三

印刷者 矢部富三

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都新宿区住吉町九五
電話東京(333)五三一(営業)
(333)五三二(編集)
振替東京〇一〇八〇二番

(風丁・落丁本は本社またはお買求め
の書店にてお取り替えいたします。)

寵
児

——はるか遠くの静かな友よ　感じるがよい
お前の呼吸がまだ空間を豊かにすること

リルケ「オルフォイスへのソネット」

……太古、地球上の空気はまだ現在のようにな「ホモジエナイズ」されていなかった。大小さまざまな形のガラス板が犇き合いながら浮遊しているような状態だった。ある部分は密度が濃すぎ、ある部分は希薄すぎて真空のようだった。凍えるところもあれば、沸騰するところもあった。そのため、地上において物体の正しい形状を見定めることはほとんど不可能なことに近かった。本来は円形のもものが、場所によって、細長い円錐形、平行四辺形、更には、一本の棒状のもの、海中の草のように頼りなく揺らぐものにすら見えるのだった。しかし、何億という年数を経るうちに、この空気も次第にホモジエナイズされていき、それに従い、光の屈折率の乱れも消えていった。そしてその頃になってようやく、地上にも二つの眼を持つ生きものたちが現われたのだった。……

こんなもつともらしい解釈を自分でつけながら、高子は頂上の鋭く尖った氷の山を、夢のなかで一心に眺めていた。ちょうどつららを逆さにしたような透明な山で、その輪郭が青空を背景に眩しく輝いていた。これは鏡に映る像のようなものだから、それでこんなに眩しいのだ、と高子は夢のはじめから了解していた。けれども人類にとっては、いくらその美しさで補いをつけてくれても、やはり太古の空気は耐えがたい、とも考えていた。それでいて、高子自身はさほど苦痛を覚えてはいるわけではなかった。多少の寒気と息苦しきがあるだけだった。

氷の山を眺めているだけの夢だった。前後がなかった。眼を開けると山があり、眼を閉じると、山は消える。素気なかった。普段の夢のように、自分の感情が気儘に動きまわることを許してはくれなかった。

太古の空気、そして透明な山の名前が富士山であること、この二つのことが夢のなかで高子の体を縛る鎖のように決められていた。実際の富士山とは似ても似つかない姿なのだが、それでも一分の隙もなく富士山でなければならなかった。自分が太古の空気のなかにいるからあのような形に見えるだけのこと、と高子は思いこんでいた。太古から存在し続けている透明な山と言えば、夢のなかで、富士山という名前しか思いつかなかったのだろう。それにしても、富士山はやはり美しい、と感嘆していた。体が動かなかった。動きたくもなかった。耳が、辺りの静けさに痺れていた。今まで人類が味わったことのない明確な静寂を、高子は寒さとして感じていた。

土曜の朝だった。娘の夏野子が泊りに来る日だった。自分の見た短かい夢にこだわらながら、

高子は手早く身支度を済ませた。

重い鉄の扉を開けた時に、戸口に置いてある牛乳のパックに気がついた。「ホモジエナイズ」という英語の文字がそこにあった。悪夢の感触ははじめからなかったが、眼醒めてみると強い不安は残っていた。その不安が朝の冷たい空気のなかで遠ざかっていった。物足りない思いがした。

土曜の午後は、学校を終えてきた小学生のピアノを五人ずつ一時間ごとに聞かなければならなかった。横に並んだ五つの部屋を、高子は順番に見てまわり、ハノンを、バッハを、ブルグミュラーを聞き、一言ずつ注意を与える。手首を下げて。左手が強すぎる。テンポをゆっくり。やがて、曲の区別がつかなくなってしまう。面倒になり、子どもを除かせ、自分で課題の曲を弾いてやり、来週、また同じ曲を持ってくるようにと言って帰してしまう。子どもたちは喜んで帰っていく。ピアノが好きな子どもなど一人もない。いや、ピアノが好きだった子どもでも、この教室に通ううちに嫌いになる。こんなレッスンはひどすぎる、と高子はいつも思うのだが、だからこそ自分のようなものでも講師として通用しているのだ、と子どもたちから眼をそらしてしまふ。どちらにせよ、子どもたちにとって積極的な害になることではない。それでも、気持が次第に逆立っていくのはどうしようもない。なぜ、あの男の子はこれ見よがしに欠伸ばかりするのだろう。あの女の子の指は、なんだってあんなに棒みたいに固いのだろう。学校で、バレー・ボールでもしているのではないだろうか。

その日は一人だけ、新しい曲に進ませてやった。今度の曲は息抜きに、メンデルスゾーンの無

言歌から一曲選んでやった。

あんな仕事は仕事と呼べるものではない、アルバイト、というものです、と高子の姉が夏野子に言った。自分と娘を、あれだけで養っていけるなんて、どうして思えるんでしょう。なにかあれば、結局こちらに来ることになる。ということは、いつだってこちらを頼りにしていることになるのです。もちろん、そうしなければ食べていけないはずはないのだから、意地を張らずに、こちらで暮らせばいいのです。喜んで迎えますよ、なにしろ二人きりの姉妹なんだから。本当に三十七にもなって、夏野ちゃんよりも分別がない。

こんなことをおばさんが言っていた、と夏野子が高子に告げた。

まだ、わたしは三十六ですけどね、とその時、高子は笑いながら呟いた。それに、こうしていても、ちゃんと生きているわ。相変わらず、あの人は心配性で困るわね。

そうは言っても、かなりいんちきなことをしているには違いなかった。高子とはとくに自分のピアノのレッスンはやめてしまっていた。ピアノこそ部屋に置いてあるが、近頃では蓋を開けたことすらない。もともと、ピアノの腕も姉の承子の方が確かだった。姉が危ながるのも無理のないことだが、それでも今まで続けてくることのできたものを自分から放棄するつもりにはなれない。二年前、母が死んだ時に、弁護士である姉の夫と相談した結果、高子の遺産相続分として、今住んでいるマンションの部屋を買った。それだけで高子には充分だった。が、姉にはその金額が法律上の相続分より少ないことが気になるらしく、以来、夏野子を通してなにかと高子に恵も

うとしてきた。夏野子の服。児童向けの文学全集。顕微鏡。自分の娘と共にピアノを習わせ、音楽会にも連れていった。

夏野子にはそんなことがうれしかったのだろうか。夏野子はこの間の正月以来、姉の家に一人で居候を決めこみ、そこから小学校に通いだした。二月の中学の入学試験まで残されたわずかな日々を最後の受験勉強に集中して費やしたい、というのが夏野子の言い分だった。おぼさんのところではお母さんみたいに子どもにいろいろなことをさせないわ。晩御飯のあと片づけをして、自分のものは自分で洗濯してアイロンもかけ、ボタンつけもするって言ったら、同情されたわよ。恥かしくなっちゃった。

夏野子は区立の中学になど行きたくない、と以前から言っていたが、ではどの中学に行きたいのか、と聞くと黙りこんでいた。間際になり、ようやくその名前を高子に告げた。そして、あわてて付け加えた。お金はおぼさんが出しておいでくれるって。本当は、それはお母さんのお金なんだから、気にするなって。

夏野子の志望校は、姉の娘が通っている私立のカトリック系の学校だった。高子は反対しなかった。反対したくてもできなかった。夏野子はすでに母親を自分から切り離していた。こんなことになるのなら、まだ自分の分として多少残っていた遺産の権利を姉と義兄に譲るのではなかった、と後悔せずにはいられなかった。けれども、姉たちが住んでいる土地を強引に分割してもらうことも言いだしかねたし、手続上面倒なことはすべて弁護士である義兄に委せてきたのだし、

高子としては当然のこととして権利を譲ってきてしまったのだった。まだ小学生の夏野子に説明して、理解させることはできないことだった。

夏野子は土曜日の夜だけ母親の家に戻ってくるようになった。几帳面に通ってきた。土曜の夜に来て、日曜の朝早々に出かけていく。公開模擬試験があるのだとか、友だちとの約束があるのだとか言っていて、出て行く。いつでも同じような背中を見せつけられる、と高子はそのたびに自分の弱さを責めたてられている気がした。日曜日の午前中ぐらいはそばに引きとめておきたい。が、それを言いだせばうるさく思われ、全く寄りついてくれなくなってしまいかもしれない。そんなことになるよりは、と笑って見送る。夏野子の父親の畑中も、そして、土居の時も、そうだった。しかし、娘の夏野子だけは別だ、と高子はすぐに思い返す。どうしても、別でなければならぬ。一週間に一度ぐらいは顔を見せに行きなさいっておばさんに言われたから、あなた、こっちに来るんでしよう、と高子は二度めの土曜日に聞いてみた。夏野子は素気なく頷いた。そうよ、お母さんから眼を離すわけにはいかないって、今にもとんでもないことをしでかしそうで。

風が強くて、街並は砂埃でかすんでいた。けれども、空は快晴だった。夢のなかの太古の澄みきった空を思い出した。

高子は急いで駅前の商店街で買物をすませてから、マンションに帰った。夏野子はまだ来ていなかった。服を着替える時間も惜しんで、夕飯の支度にとりかかった。昼に素うどんを喉に流しこんだきり、なにも食べていなかった。空腹感が最早、痛みに変わっている。このところ、食欲

が増す一方なのだ。体に肉もつきはじめている。体重計を持っていないので正確には分からないが、三、四キロは確実に増えている感じがする。それなのに、自分では病気があるのではないか、と思われるほど、毎日、気分が悪くて仕方がない。あまり胸が重苦しいので、体温計で熱を測ってみることもある。微熱が、必ずあった。夏野子がおなかのなかにいる時が、ちょうど、同じようだった。悪い病気にでもなったのではないか、と不安になるほど微熱と咳で悩まされているうちに、まだ二カ月も経たないうちに四キロか五キロ、体重の方は増えていた。畑中にその話をしているうちに、はじめて、もしや、という気持ちになった。心当たりがはじめから、ないわけではなかったのだった。

今度もやはり、思い当たる機会が高子にはあった。野菜を刻みながら、幾度も胸のなかで日数を計算してみた。長田と最後に会ったのが、十二月の中頃だった。辻褄が不愉快なほど合ってしまふ。でも、まだ分らない、と高子は下腹の変化を認めかける自分を無理矢理抑えて、調理を続ける。いろいろ迷ったが、今度は鳥鍋にした。夏野子と話しながら食べるには、鍋ものがいい。ばんよい。

鍋の準備をおおかたすませてから、夏野子の部屋に掃除機をかけた。二DKのマンションで、四畳半の方を夏野子にあてがい、高子は六畳の方を自分の部屋としていた。ピアノを置き、洋服ダンス、鏡台を入れると、それだけで夏野子の部屋より狭くなってしまった。それで日曜など、くつろぐ時は夏野子の部屋で過ごすようになっていた。日の当たるのは、その部屋とダイニン

グ・キッチンだけなのだ。高子の部屋には、窓もない。去年の夏休みに、夏野子が自分で安い木綿の生地を見つけてきて、姉の家のミシンで器用に縫い上げたカーテンが、まだ四畳半の部屋に吊り下げである。その赤い格子縞のカーテンのおかげで、高子にはそこが多少居心地の悪い場所になってしまった。夏野子は花も気紛れに一輪二輪と買ってきて、自分の勉強机を飾っていた。高子が食卓の上にも分けて欲しい、と頼んでみても、決して分けてくれなかった。壁の仔猫と高山植物の写真も、まだ貼ったままになっている。しかし、ランドセルと勉強に必要なものと当面の着替えと、そして夏野子の体温、息づかい、においが消えてしまっている。

高子はいくつか訪ねてくる夏野子を、できることなら三、四歳の頃のように食事を取り上げ、裸足のまま外に追い出すなりして、懲らしめてやりたかった。幼児の夏野子にはそれはすばらしく効きめのある懲罰だった。夏野子は泣きじゃくりながら、肉や卵を口に入れた。果物と白い御飯しか食べたがらない、瘡せっぽちの子どもだった。

七時に近い時刻に、ドアのチャイムが鳴った。高子はわざとドアには向かわなかった。チャイムがもう一度鳴る。それから、鍵をまわす音が聞えた。

高子は、ふと夏野子に尋ねてみたくなった。夏野子は二杯目の御飯を口に運んでいる。鳥肉もほとんど食べ尽してしまった。

——冬に軽井沢に行った時のこと、憶えている？　あなたはまだ五歳だったけど。

夏野子は口を動かしながら少しの間考えこんだ。

——雪がいっぱいあったところ？

——そうよ、ほら、雪合戦もしたじゃない。

——うん、憶えてる、なんとなく。……あの雪、とっても痛かった。

——あなた、泣いていたわよ、いたい、いたいって。雪をさんざん素手でいじってから。

——手袋は？

——あなたのは忘れちゃったの。それで、わたしの手袋をはめさせたのよ。あったかいって、

あなたは大喜びだったわ。

——そうだった？

——そうよ、こんないいものをどうしてママだけが持っているんだって、そのあとで早速文句を言いはじめた。文句の多い子だったから、あなたは。

——そんなこと……。あと、迂り台で遊ばなかった？

——ふうん、結構憶えているものなのね。雪が積っているのに、迂るんだって大騒ぎだったのよ。冷たい思いをするのはあなたなんだからって、結局、迂らせちゃった。でも、さすがに一回しか迂ろうとしなかったわ。雪が自分の体と一緒に迂り落ちるから、こわかったのね。お尻も濡れるし。

——うん、そうなの、それを憶えている。……

夏野子は鍋から小さな鳥肉を取り上げた。

——それより、お母さん……試験がもう来週なの。来週の金曜と土曜日。

——へえ。……しっかりね。

——そうじゃないのよ、お母さんも来てくれなくちゃ困るの。……面接試験が、親も一緒なんだって。お願いだから、一緒に行って。

——急にそんなこと言われても……。

高子は新しくビールをコップに注いで、飲んだ。

——お母さんは……。

夏野子の顔が赤くなった。高子はこみあげてきた腹立たしさを隠さずに、口早に言った。

——もっと前から言っといってくれなくちゃ。都合つけるのも、そんなに簡単なことじゃないんだから。でもまあ、今更、しょうがない、今度は行ってあげるけど……、それにしてもお金持のお嬢さんばかりなんでしょう？ 気後れするわね、そんなところ。

——そんなこと、ない。……じゃあ、お母さん、来てくれるのね。

——しょうがないって言ってるでしょう。

夏野子は頷くと、また黙りこんで、御飯を口に詰めこみはじめた。背丈が伸びすぎたせいか、この頃、猫背が目立つようになっていた。髪の毛はいかにも女の子らしく二つに分け、毛先を柔